「山の詩人」白居易〔三〕

――「奏状」・京兆府戸曹参軍・藍田山悟真寺・太子左賛善大夫――

諸田龍美

第三稿となる本稿では、元和二年（八〇七）三十六歳の秋から、元和十年（八一五）四十四歳夏までの八年間を対象に、「山の詩人」としての白居易の本質を浮き彫りにしたい。[1]整屋県尉から長安に召還され、翰林学士、左拾遺、京兆府戸曹参軍を経て下邽に服喪。再び召されて太子左賛善大夫となった時期にあたる。その直後、元和十年（八一五）六月には宰相武元衡が暗殺され、居易はいち早く上書。それが越権行為と見なされ、八月には江州司馬へ左遷された。

太子左賛善大夫という閑職に就いていた白居易が、なぜいち早い上書に及んだのか。平岡武夫氏は、以下のようにいう。

三年の喪が終わって、元和九年（八一四年）の冬に長安に出て来た彼に与えられた官職は、太子左賛善大夫であった。この官、『大唐六典』では正五品下。さきの京兆府戸曹参軍が正七品下であったのに比べると、官品は高い。しかしその職務は、要するに太子のお守役である。……清官ではあるが、要職ではない。白居易は失望する。……白居易が不遇をかこつこと半年あまり、元和十年六月三日の未明、宰相の武元衡が出勤の途上に暗殺された。……拾遺・翰林の要職をなつかしみ、賛善の閑職に気持をもてあましていた彼に、武元衡暗殺事件は看過できないことであった。[2]

いち早い上書の原因を「閑職への不満」に求める見解はわかりやすく、通説になっていると見てよいだろう。[3]しかし、実情に即して仔細に検討した場合、こうした見方は成り立ち難いようである。そのことを本稿では論じたいと思う。

一　「奏状」にみる左拾遺の「滅私奉公」

元和二年（八〇七）十一月六日、翰林学士となった白居易は、翌元和三年（八〇八）四月二十八日、左拾遺に任命された。この時期盛んに制作された諷諭詩については、すでに膨

大な研究の蓄積がある。ここでは、諷諭詩の制作によって、居易が、無理解や反発、非難や中傷に晒される結果になったことのみを確認しておきたい。元和十年に江州で書かれた「元九に与ふる書（与元九書）」（1486）にいう。[4]

凡そ僕の「雨を賀す」の詩を聞けば、衆口籍籍として、已に宜しきに非ずと謂ふ。僕の「孔戡を哭す」の詩を聞けば、衆面脉脉として、尽く悦ばず。「秦中吟」を聞けば、則ち権豪貴近なる者、相目して色を変ず。「楽遊園に登りて足下に寄す」詩を聞けば、則ち政柄を執る者扼腕す。「紫閣村に宿る」詩を聞けば、則ち軍要を握る者切歯す。大率此くの如し、偏く挙ぐべからず。相与せざる者、号して名を沽ると為し、号して詆訐と為し、号して訕謗と為す。苟くも相与する者も、則ち牛僧孺の戒めの如しとす。乃ち骨肉妻孥に至りては、皆我を以て非と為すなり。其れ我が非とせざる者は、世を挙げて両三人に過ぎざるのみ。

凡聞僕賀雨詩而衆口籍籍、已謂非宜矣。聞僕哭孔戡詩、衆面脉脉、尽不悦矣。聞秦中吟、則権豪貴近者、相目而変色矣。聞登楽遊園寄足下詩、則執政柄者扼腕矣。聞宿紫閣村詩、則握軍要者切歯矣。大率如此、不可偏挙。不相与者、号為沽名、号為詆訐、号為訕謗。苟相与者、則如牛僧孺之戒焉。乃至骨肉妻孥、皆以我為非也。其不我非者、挙世不過両三人。

諷諭詩作成によりこうした状況下に置かれた白居易が、強い心的ストレスを抱えていたことは想像に難くない。しかし、「諷諭詩による諷諫」は、詩人の本領発揮ではあっても、左拾遺の職務としては特殊な形式である。一般的には、散文の形式で皇帝へ意見具申するのが通例であった。それが「奏状」に他ならない。

『白氏文集』巻四十一から巻四十四には「奏状」五十八篇（1947～2012）が四巻にまとめられている。このうち巻四十一・四十二の二巻に収められた三十四篇（1947～1984）は、元和二年から同六年の間に制作された作品であり本稿の対象となる。

この「奏状」三十四篇のうち、十二篇は恩賜への感謝状であり、二篇は自身の処遇に関する陳情と感謝である。それ以外の、真に「意見書」と呼ぶにふさわしい二十篇を見ると、左拾遺期の作が十五篇、左拾遺期と確定できない端境期のものが二篇、京兆府戸曹参軍期のものが三篇である。[5] 白居易の「奏状」は、翰林学士の時期に書かれたものだが、その主軸は、左拾遺期の十五篇（或いは端境期の二篇を含めた十七篇）にあると見てよい。これらの「奏状」を読むと、左拾遺として居易がいかに「滅私奉公」的に職務を遂行していたか、その覚悟のほどを確認できる。

① 「大凡人之情、位高則惜其位、身貴則愛其身。……故拾遺之置、所以卑其秩者、使位未足惜、身未足愛也。」

「臣所以授官已来、僅将十日、食不知味、寝不遑安。唯思粉身、以答殊寵、但未獲粉身之所耳。」

「初授拾遺献書」（1947・元和三年五月八日）

② 「臣今言出身戮、亦所甘心。何者、臣之命至軽、朝廷之事至大故也。」「若以臣此言、理非允当、……則臣等見在四人亦宜各加黜責。」「臣今職為学士、官是拾遺。日草詔書、月請諫紙。臣若黙黙惜身不言、豈惟上辜聖恩、実亦不負神道。所以密緘手疏、潜吐血誠。苟合天心、雖死無恨。」

「論制科人状」（1948・元和三年）

③ 「今臣忘身命、瀝肝膽、為陛下痛言者、非不知逆耳、非不知危身。但以螻蟻之命至軽、社稷之計至重。」

「論承璀職名状」（1964・元和四年）

これら①②③に見える「粉身」「身戮」「臣之命至軽」「加黜責」「吐血誠」「雖死無恨」「忘身命」「危身」「螻蟻之命至軽」といった表現は、左拾遺としての職務、即ち、天子への諷諫に、居易が正に「命がけで」取り組んでいたことを示すものである。事実、『新唐書』巻一一九「白居易伝」によれば、③の奏状に関連して、居易は後日、憲宗の面前で「陛下、誤てり」と直訴。「帝（憲宗）色を変じて罷む。李絳に謂ひて曰く『是の子、我自ら抜擢するに、乃ち敢へて爾する。我此れを堪ふるに叵し。必ず之を斥けん』（帝変色罷。謂李絳曰『是子、我自抜擢、乃敢爾。我叵堪此。必斥之』）」と、憲宗に言わしめている。憲宗への諷諫は、居易の誠意（良心）に発する「命がけの行為」であった。

しかし、周知のように居易は「自己の心身の安適」を誰より大切にした、自己愛の強い詩人である。その彼が、左拾遺の時期には、自分の命など「螻蟻の命のように軽い」と述べねばならぬ立場に置かれた（或いは「自らその身を置いた」）。その葛藤やストレスは極めて大きかったと推察される。

さらに元和五年（八一〇）二月、監察御史の元稹が、長安へ召還される途次、敷水駅で宦官劉士阮と争い、三月、江陵士曹掾に左遷された。居易は直ちに上奏文を奉じ、重ねて元稹の無罪を主張したが（「論元稹第三状」1965）、憲宗の裁定はついに覆らなかったのである。

二　山の詩人①――京兆府戸曹参軍への転職

元稹は江陵に着くと、左遷の道中で制作した詩十七篇を贈ってきた。居易の「和答詩十首」（0100～0110）は、これに応じた連作である。序文（0100）に「属直宿に拘牽せられ、居るに暇日無く、故に即時に意の如くならず。旬月より来、多く病仮を乞ふ。仮中稍閑なれば、且く巻中の尤なる者を摘り、継ぎて十章を成し、亦た三千言を下らず。（属直宿拘牽、居無暇日、故不即時如意。旬月来、多乞病仮。仮中稍閑、且摘巻中尤者、継成十章、亦不下三千言。）」とあることから、この連作は、五月五日に京兆府戸曹参軍となる直前、病気休

暇中の四月に制作されたと見てよいだろう。

この連作には、両者の価値観の異同が示されているが、「其の五　四皓廟に答ふ（答四皓廟）」（0105）では、出処進退に関する考え方の相違が浮き彫りになっている。前漢の四皓を、出処進退に一貫性がないと批判する元稹（元詩に「顕晦遺跡有り、前後倫ならざるを疑ふ」と）に対して、居易は答詩の冒頭から次のように反論した。

天下に道有れば見れ、道無ければ巻きて之を懐にす／此れ乃ち聖人の語、吾　諸を仲尼に聞けり／嬌嬌たる四先生、同に稾く希世の資／時に随ひて顕晦有り、道を秉りて磷緇し（摩滅も黒ずみもしない）／……／何ぞ必ずしも長に迹を隠さん、何ぞ必ずしも長に時を済はん／……／先生　道甚だ明らかなり、夫子（元稹）猶ほ或いは非る／願わくは子　其の惑ひを辨ぜんことを、為に予此の詩を吟ず

天下有道見、無道巻懐之。此乃聖人語、吾聞諸仲尼。嬌嬌四先生、同稾希世資。随時有顕晦、秉道無磷緇…何必長隠迹、何必長済時…先生道甚明、夫子猶或非。願子辨其惑、為予吟此詩。

「諸を仲尼に聞けり」とは、『論語』泰伯篇の「天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隠る」、衛霊公篇の「邦に道有れば則ち仕へ、邦に道無ければ則ち巻きて之を懐にすべし」を指す。これは、『孟子』尽心上に「古の人、志を得れば沢は民に加わり、志を得ざれば身を修めて世に見る。窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を済ふ（古之人、得志沢加於民、不得志、修身見於世。窮則独善其身、達則兼済天下）」という「独善・兼済」と同じ考えであり、「与元九書」で「僕、不肖なりと雖も、常に此の語を師とす。（僕雖不肖、常師此語）」と述べた、処世の指針に他ならない。

今、本稿の視点から注目したい点は、左拾遺の任期をほぼ終えようとしていたこの時期、居易自身が退任後の進退について思い悩んでいたという点である。「天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隠る」という指針に照らせば、この時期、居易の志向は「隠居・独善」の方向へ強く傾いていただろう。

例えば、元和五年の閑適詩「自ら写真に題す（自題写真）」（0229）は、左拾遺を辞任する直前の作と目される（注1の拙稿『山の詩人』白居易〔一〕を参照）が、次のようにいう。

我が貌　自ら識らず、李放　我が真を写す／静かに神と骨とを観れば、合に是れ山中の人なるべし／蒲柳は質朽ち易く、麋鹿は心馴れ難し／何事ぞ赤墀の上、五年　侍臣と為る／況んや剛狷の性多く、世と塵を同じうし難し／唯だ貴相に非ざるのみならず、但だ恐る　禍ひを生ずる因ならんことを／宜しく当に早く罷め去り、雲泉の身を収取すべし

我貌不自識、李放写我真。静観神与骨、合是山中人。
蒲柳質易朽、麋鹿心難馴。何事赤墀上、五年為侍臣。
況多剛狷性、難与世同塵。不唯非貴相、但恐生禍因。
宜当早罷去、収取雲泉身。

即ち、自分の骨相を見れば、まさに「山中の人」である。剛直狷介な性格は災禍を招きかねない。早く官界を辞して「雲泉の湧く山中に身を置くのがよい」と。

さらに、元和五年四月の感傷詩「青龍寺早夏」（0414）の後半にいう。

春去りて来　幾日ぞ、夏雲　忽ち嵯峨たり／朝朝　時節を感ず、年鬢　暗に嗟跎たり／胡為れぞ朝市を恋ひて、去りて煙蘿（山中）に帰らざる／青山は寸歩の地、自ら問ふ　心如何と

春去来幾日、夏雲忽嵯峨。朝朝感時節、年鬢暗嗟跎。
胡為恋朝市、不去帰煙蘿。青山寸歩地、自問心如何。

ここでも「朝市を恋う」ことをやめ「煙蘿（山中）に帰る」べきではないかと、進退について自問している。「青山は寸歩の地」とあるが、この「青山」は、おそらく長安南方に連なる秦嶺山脈。さらに特定すれば、秦嶺山脈の東端に位置する藍田山であった可能性もある。後出の詩「登龍昌上寺望江南山、懐銭舎人」（0559・元和十五年）の自注に「昔常与銭舎人登青龍寺上方、同望藍田山、各有絶句。銭詩云、偶来上寺因高望、松雪分明見旧山。」とあり、白居易は銭徽と青龍寺に登り藍田山を眺めたことがあった。銭徽（755－829）は、「和銭員外早冬翫禁中新菊」（0749・元和三～五年）の詩句「唯有此花開、殷勤助君惜」の自注に「銭嘗居藍田山下、故云。」とあるように、かつて藍田山麓に住んでいた。この詩の句に「心は陶彭沢に似たり」とあるように、隠逸を好む人である。[6] 元和元年に入朝。祠部員外郎を拝した後、元和三年八月から翰林学士。嘗て藍田山に住んでいた同僚の銭徽から、山の良さを聞き及んでいたとすれば、この詩の「青山」が、藍田山を念頭に置く言葉であった可能性もある。老病の母を養う立場では「青山隠棲」の実現は難しいが、止みがたい願望があったのだろう。

さらに、この時期、銭徽以上に居易を「隠居・独善」の方向へ強く引きつけた人物がいた。同年（貞元十六年）の進士で二十八歳年長の呉丹（744－825）である。節度使の判官や監察御史を拝した後、元和五年に東宮職の太子通事舎人に任ぜられた。居易は「呉丹に贈る（贈呉丹）」（0196・元和五年）詩で、敬愛の情をこう詠じている。

巧者は力苦労し、智者は心苦憂す／愛す　君が巧智無く、終歳　閑にして悠悠たるを／嘗て御史の府に登り、亦た東諸侯（節度使）に佐たり／手に糺謬の簡を操り、心に決勝の籌（計略）を運らす／宦途は風水の似く、君が心は虚舟の如し／汎然として有（固執）せず、進退自由を得たり／今来　多冠（御史）を脱し、時に往きて

龍楼（太子）に侍す／官曹は心に称ひて静かに、居処は跡に随つて幽なり／冬は南栄の日を負ひ、支体甚だ温柔なり／夏は北窓の風に臥し、枕席涼秋の如し／南山舎下に入り、酒甕床頭に在り／人間に閑地有り、何ぞ必ずしも林丘に隠れん／顧みるに我愚且つ昧、生を労して殊ほ未だ休まず／一たび金門の直に入り、星霜三四周／主恩は信に報い難く、近地徒らに久しく留まる／終に当に閑官を乞ひ、退いて夫子（呉丹）と遊ぶべし

巧者力苦労、智者心苦憂。愛君無巧智、終歳閑悠悠。
嘗登御史府、亦佐東諸侯。手操糺謬簡、心運決勝籌。
宦途似風水、君心如虚舟。汎然而不有、進退得自由。
今来脱豸冠、時往侍龍楼。官曹称心静、居処随跡幽。
冬負南栄日、支体甚温柔。夏臥北窓風、枕席如涼秋。
南山入舎下、酒甕在床頭。人間有閑地、何必隠林丘。
顧我愚且昧、労生殊未休。一入金門直、星霜三四周。
主恩信難報、近地徒久留。終当乞閑官、退与夫子遊。

太子通事舎人となった呉丹の生き方や暮らしぶりが、居易には理想的なものに見えた。役所は閑静で、居場所は幽邃。冬は暖かく、夏は涼しい。終南山が見える家には、酒もたっぷりある。「人間に閑地有り、何ぞ必ずしも林丘に隠れん」。前掲した「青龍寺早夏」の詩では、なお「青山は寸歩の地、自ら問ふ　心如何」と逡巡していた。だが、呉丹の生き方に触発されて、「林丘（青山）」ではなく「人間（都市）」に「閑地」を求めることに決めたのだろう。その意志表明が「終に当に閑官を乞ひ、退いて夫子（呉丹）と遊ぶべし」の最終句である。

ちなみに、居易は以降の官歴において、太子左賛善大夫（元和十年）、太子賓客分司（大和三年）、太子賓客分司（大和七年）、太子少傅（大和九年）など太子職にしばしば就く。その原点は、この「太子通事舎人・呉丹への憧憬」であったのかもしれない。

この決断を、居易はさっそく実行した。「閑官」である京兆府戸曹参軍への転職と、新昌里から宣平里への転居である。題下自注に「四月二十六日進む」とある「陳情を奏するの状（奏陳情状）」（1971）にいう、「伏して以ふに、拾遺より京兆府の判司（長官の属官）を授けらるるは、往年の（翰林）院中に、曽て此の（前）例有り。資序（官位）は（左拾遺と）相類し、俸禄は稍や多し。儻し此の官を授けらるれば、臣実に幸甚なり（伏以、自拾遺授京兆府判司、往年院中、曽有此例。資序相類、俸禄稍多。儻授此官、臣実幸甚）」と。この希望が容れられ、京兆府戸曹参軍を授けられたのは、五月五日であった。その翌日、居易は「官を謝する状（謝官状）」（1972）を進上し、こう述べている。「況んや前件の官（京兆府戸曹参軍）、位望は小なりと雖も、俸料は稍や優り、臣今之を得るは、貴位に登るに勝るをや（況前件官、位望雖小、俸料稍優、臣今得之、勝登貴位）」と。白居易が戸

曹参軍の職を望んだのは、一般には「母に孝養を尽くせる官職であるから」と理解されている。しかし、「臣今之を得るは、貴位に登るに勝るをや」という表現には、敢えて「貴位に登る」ことを望まなかった居易の気持ちが滲む。それは、同じ時に書かれた「初めて戸曹に徐せられ、喜びて志を言ふ（初除戸曹、喜而言志）」（0197）を読めば明かである。任官祝いに来た客に、詩の後半でこう述べている。

我に平生の志有り、醉後君が為に陳べん／人生百歳の期、七十なるは幾人か有る／浮栄と虚位と、皆是れ身の賓なり／唯だ衣と食と有り、此の事粗ぼ身（生命）に関す／苟も飢寒を免るるの外、餘物は尽く浮雲

我有平生志、醉後為君陳。人生百歳期、七十有幾人。浮栄及虚位、皆是身之賓。唯有衣与食、此事粗関身。苟免飢寒外、餘物尽浮雲。

居易の「平生の志」とは、「浮栄と虚位と、皆是れ身の賓（外物）なり」「苟も飢寒を免るるの外、餘物は尽く浮雲」という考えの実践であった。戸曹参軍への転職はまさにそれであり、居易は自ら「貴位に登る」ことを「望まなかった」のである。その選択は一定の満足をもたらした。転居した宣平里における閑居について「秋居　懐を書す（秋居書懐）」（0198）詩にいう。

門前賓客少なく、階下松竹多し／秋景西牆に下り、涼風東屋に入る／……／丈室身を容るべく、斗儲腹を充たすべし／況んや治道の術無く、坐ながら官家の禄を受く／一株の桑を種ゑず、一壠の穀を鋤かず／終朝飯飡に飽き、卒歳衣服に豊かなり／此を持して愧心を知れば、自然に足ることを為し易し

門前少賓客、階下多松竹。秋景下西牆、涼風入東屋…丈室可容身、斗儲可充腹。況無治道術、坐受官家禄。不種一株桑、不鋤一壠穀。終朝飽飯飡、卒歳豊衣服。持此知愧心、自然易為足。

さらに同年末に詠んだ「几に隠る（隠几）」（0232）にいう。

身適して四支を忘れ、心適して是非を忘る／既に適して又適を忘る、知らず吾是れ誰なるかを／……／今日は復た何の日ぞ、身心忽ち両ながら遺る／行年三十九、歳暮日斜めなる時／四十にして心動かず、吾今其れ庶幾し

身適忘四支、心適忘是非。既適又忘適、不知吾是誰…今日復何日、身心忽両遺。行年三十九、歳暮日斜時。四十心不動、吾今其庶幾。

「几に隠る」（脇息に寄りかかる）の詩題は、『荘子』斉物論篇に「南郭子綦、几に隠りて坐し、天を仰いで嘘す」とあるのによる。朱子は「此れ楽天、文を以て滑稽（おどけ）するなり」（『朱子語類』巻一四〇、「論文（詩）」下）という。何れにせよ、宣平里での閑居は快適なものであった。居易が憧れた呉丹は、儒玄兼学だが、特に道家で身を持した人。居易の神道碑に「既に冠すれば、道書を喜び、真籙を奉じ、毎

に専気入静、不粒食なる者累歳。顕気充ちて丹田沢ひ、飄然として出世の心有り」という（「故饒州刺史呉府君神道碑銘并序」2926）。「几に隠る」詩は、こうした呉丹の道家風をことさら真似て、強調した姿であったかもしれない。

翌元和六年の春も、平和であった。「春眠」（0233）の詩にいう。

新たに浴して支体暢び、独り寝ねて神魄安し／況んや夜深るまで坐するに因りて、遂に日高くるまで眠るを成すをや／春被薄きも亦た暖かく、朝窗深くして更に閑なり／都て人間の事を忘れ、枕上の仙を得るに似たり／至適は夢想無く、大和は名言し難し／全く彭沢の酔ひに勝り、曹渓の禅に敵せんと欲す／何物か我を呼びて覚ます、伯労声関関たり／起き来れば妻子笑ふ、生計春落然たり

新浴支体暢、独寝神魄安。況因夜深坐、遂成日高眠。
春被薄亦暖、朝窗深更閑。都忘人間事、似得枕上仙。
至適無夢想、大和難名言。全勝彭沢酔、欲敵曹渓禅。
何物呼我覚、伯労声関関。起来妻子笑、生計春落然。

要するに、元和五年の居易は、左拾遺として奮闘した軋轢から、「宜しく当に早く罷め去り、雲泉の身を収取すべし」と、「独善・閑居」への志向を強めていた。四月には「青山隠棲」か「市中閑居」か揺れる心境を詠ったが、やがて太子通事舎人呉丹の生き方を知り「市中閑居」を決行。戸曹参軍へ転職を願い出、宣平里に転居して、「市中の閑居」を始めた。その暮らしを居易は喜び、満足を覚えていたのである。

三　下邽への不適応と長安復帰への動き

ところが、元和六年四月三日、母陳氏が五十七歳で亡くなった。居易はただちに京兆府戸曹参軍・翰林学士を辞め、下邽に退居。以後、三年七ヶ月ほど下邽での生活が続く。この時期は、別稿[7]で論じたように、居易が「閑適への決意」を固めた重要な時期である。代表作として「適意二首」（0236・0237）をあげておく。「其の一」にいう。

十年旅客と為り、常に飢寒の愁ひ有り／三年諫官と作り、復た尸素（無駄飯食い）の羞多し／酒有れども飲むに暇あらず、山有れども遊ぶを得ず／豈に平生の志無からんや、拘攣（官職や地位に束縛）せられて自由ならず／一朝渭上に帰り、泛たること繋がざる舟の如し／心を世事の外に置き、喜びも無く亦た憂いも無し／終日一蔬食、終年一布裘／寒来弥よ嬾放、数日に一たび頭を梳る／朝には睡り足りて始めて起き、夜には酌み酔ゑば即ち休む／人心は適に過ぎず、適の外復た何をか求めん

十年為旅客、常有飢寒愁。三年作諫官、復多尸素羞。
有酒不暇飲、有山不得遊。豈無平生志、拘攣不自由。
一朝帰渭上、泛如不繋舟。置心世事外、無喜亦無憂。

終日一蔬食、終年一布裘。寒来弥嬾放、数日一梳頭。
朝睡足始起、夜酌醉即休。人心不過適、適外復何求。

「其の二」にいう。

早歳　旅遊に従ひ、頗る時俗の意を諳んず／中年班列を忝なくし、備に朝廷の事を見る／客と作るは誠に已に難きも、臣と為るは尤も易からず／況や予は方（方直）にして且つ介（狷介）、挙動忤累多きをや／道を直くしては我が尤めを速やかにするも、詭遇（不正な手段）は我が志に非ず／胸中十年の内、顥然の気を銷尽す／田畝に返りてより、頓に憂愧無きを覚ゆ／蟠木は用施し難く、浮雲は心遂げ易し／悠悠たり身と世と、此より両つながら相棄てん

早歳従旅遊、頗諳時俗意。中年忝班列、備見朝廷事。
作客誠已難、為臣尤不易。況予方且介、挙動多忤累。
直道速我尤、詭遇非我志。胸中十年内、銷尽顥然気。
自従返田畝、頓覚無憂愧。蟠木用難施、浮雲心易遂。
悠悠身与世、従此両相棄。

ここには左拾遺であった足かけ三年の不自由とストレス、下邽における解放と閑適への決意が表明されている。

元和六年十月八日には、下邽に祖父母や父を改葬。母と娘を埋葬した。元和八年二月二十五日には末弟と外祖母の改葬も済ませ、下邽は、名実共に白家の「墳墓の地」となった。太原から韓城に分かれた白家の一族が下邽に移り住んだのは、曾祖父白温の時[8]。次の「西原晩望」（0474・元和七～元和八年）を読めば、居易自身も死後はこの地に埋葬されると考えていたことがわかる。後半にいう。

近歳始めて家を移して、飄然として此の村に住む／新屋五六間、古槐八九樹／便ち是れ衰病の身、此の生終老の処

近歳始移家、飄然此村住。新屋五六間、古槐八九樹。
便是衰病身、此生終老処。

しかし、墳墓の地に定めた下邽は、平地に丘が点在する農村であり、「山の詩人」居易の本性に適う土地柄、風土ではなかった。この時期の詩を仔細に読めば、しばしば下邽への不適合感が表明されている。代表例として「村東の古塚に登る（登村東古塚）」（0459・元和八年）にいう。

高低あり古時の塚、上に牛羊の道有り／独り立つ最高の頭、悠なる哉此の懐抱／頭を廻らして村に向かひて望めば、但だ荒田の草を見るのみ／村人花を愛せず、多く栗と棗とを種う／此の村に来たり住してより、風光の好きを覚えず／花は少なくして鶯も亦た稀なり、年年春暗に老ゆ

高低古時塚、上有牛羊道。独立最高頭、悠哉此懐抱。
廻頭向村望、但見荒田草。村人不愛花、多種栗与棗。
自来此村住、不覚風光好。花少鶯亦稀、年年春暗老。

下邽は、居易にとって「白家の墳墓の地」ではあっても、

「真の故郷」とは感じ得ない土地柄であった。むしろ居易の本性と不適合な「反故郷」であり、この不適合感は、下邽の地へ自身が埋葬されることを避ける結果へと繋がってゆく。

元和九年の四月に三年の服喪期間が終わると、長安復帰に向けて、周囲から様々な働きかけが始まったらしい。「袁相の書を得たり（得袁相書）」（0781）にいう。

穀苗深き処一農夫、面黒く頭斑にして手に鋤を把れり／何ぞ意はん使人猶ほ我を識り、田に就き来たりて送る相公の書

穀苗深処一農夫、面黒頭斑手把鋤。何意使人猶識我、就田来送相公書。

元和八年に戸部尚書に任ぜられた袁滋から手紙が届いたのである。長安復帰に関するものだろう。銭徽（0782・0797）や樊宗師（0786）ら友人からも手紙が来た。李建は馬を贈ってきたようだが、これは辞退している。「李十一に馬を還す（還李十一馬）」（0798）にいう。

伝語す李君馬を労寄すと、病来唯だ杖に拄（ささ）へられ身を扶く／縦ひ強ひて騎らんと擬するも出づるに処無し、却って将て牽き与へよ朝に趂（おもむ）く人に

伝語李君労寄馬、病来唯拄杖扶身。縦擬強騎無出処、却将牽与趂朝人。

李建が馬を贈ったのは、復帰の準備を考えてのことだろう。居易は、「帰田三首其の二」（0245・元和七年）に「田を種うるは計已に決す、決意復た何如。馬を売り黄犢（子牛）を買ひ、徒歩して田廬に帰る。」と述べていた。下邽退居の際、馬を売り払っていたのである。

長安復帰の際、最も重要な点は、どのような官職を望むか、ということだろう。希望実現のためには、朝廷内の事情と、居易の希望とを折り合わせる「仲介役」が必要である。それを買って出た友人のうち、おそらく礼部侍郎の崔羣と翰林院の銭徽、この二人が中心的役割を担ってくれた。この両名に宛てた長篇詩が、元和九年の「渭村に退居し、礼部の崔侍郎・翰林の銭舎人に寄する詩一百韻（渭村退居、寄礼部崔侍郎・翰林銭舎人詩一百韻）」（0807）である。詩の前段では下邽退去後の生活や心情が描写され、中段では、朝官であった時期、二人と肝胆相照らす仲であったこと等が懐古されている。以下では、後段、朝廷復帰に向けた動向と居易の心境が表現された箇所を抜粋する。

殷勤なり翰林の主、珍重す礼闈の郎／煦沫（援助）誠に多謝するも、搏扶（飛躍）豈に望む所ならんや／提攜すれども気力を労し、吹簸すれども飛揚せず／拙劣才何ぞ用ひん、龍鍾（失意のさま）分自ら当る／……／不動を吾が志と為し、無何は是れ我が郷なり／憐れむべし身と世と、此れより両ながら相忘れん

殷勤翰林主、珍重礼闈郎。煦沫誠多謝、搏扶豈所望。提攜労気力、吹簸不飛揚。拙劣才何用、龍鍾分自当。

不動為吾志、無何是我郷。可憐身与世、従此両相忘。

ここには、居易を引き立てんとする両友への感謝と、にもかかわず、自分には出世飛躍の意志はなく、不動の心境を守り、閑居して世俗のことは忘れたい、という希望が表明されている。銭徽と崔羣が中心となって、顕官への復帰を画策、打診してくれていたことは疑いない。だが、居易は、ポーズでは無く、おそらく真剣にそれを謝絶した。望めば手に入ったはずの顕官への復帰を、居易はなぜ拒否したのか。その原因の一つは、先に「客と作るは誠に已に難きも、臣と為るは尤も易からず」（「適意」其の二）と述べていたような、諫官時代に体験した、強烈なストレスの再現を回避するためであったと推定される。加えて、この時期の居易は、悟真寺との運命的な出会いを体験していた。この体験がどのような心理効果をもたらしたのか、節を改めて考察したい。

四　山の詩人②――悟真寺への憧れと「故郷」の発見

元和九年八月中旬、白居易は藍田県の南、王順山にある悟真寺に遊んだ。その様子を紀行風に記した長篇詩が「悟真寺に遊ぶ一百三十韻（遊悟真寺一百三十韻）」（0264）である。冒頭にいう。

元和九年の秋、八月　月の上弦／我悟真寺に遊ぶ、寺は王順山に在り……

元和九年秋、八月月上弦。我遊悟真寺、寺在王順山…

以下、王順山悟真寺に遊んだ「五昼夜」の様子が詳細に描写されてゆく。居易はなぜこの時期に悟真寺を訪れたのか。憶測すれば、かつて藍田山に住んでいた銭徽が、この元和九年に、居易の春先からの眼病等を心配し、重ねて手紙を寄越している（「病中作」0782・「得銭舎人書問眼疾」0797）。父の銭起には「登玉山諸峯、偶至悟真寺」詩（『銭考功集』巻二）もある。こうした諸縁が重なり、喪の明けた好時節に、かねて銭徽から聞き及んでいた探訪を思い立ったのではなかったか。

なお、関連の詩に「藍田山に遊んで居を卜す（遊藍田山卜居）」（0250）、「悟真寺に遊び、山下を廻り、張殷衡に別る（遊悟真寺、廻山下、別張殷衡）」（0784・元和九年）がある。前者（0250）の繫年については、元和七年説（花房・朱金城）と元和九年説（羅聯添）の二つがある。他二作の内容との一致、及び元和七年はなお喪中であることを考慮すれば、この三詩は何れも、元和九年八月中旬に悟真寺を訪れた際の作品と見るべきであろう。

「悟真寺に遊ぶ一百三十韻（遊悟真寺一百三十韻）」詩の最後にいう。

霊境と異跡と、周覧して殫くさざる無し／一遊五昼夜、返らんと欲して仍ほ盤桓す／我は本　山中の人、誤って時網の為に牽かる／牽率して書を読ましめられ、推挽し

て官に效さしめらる／既に文字の科に登り、又諫諍の員を忝うす／拙直にして時に合はず、益無くして素飡に同じ／此を以て自ら慙惕し、戚戚として常に歓び寡なし／成る無くして心力尽き、未だ老いざるに形骸残す／今来簪組を脱し、始めて憂患を離るるを得たり／山水の遊を為すに及んで、弥よ疏頑を縦にするを得たり／野麋は羈絆を断ち、行走拘攣無し／池魚は放たれて海に入り、一往　何れの時にか還らん／身に居士の衣を著け、手に南華の篇を把る／終に此の山に来たりて住し、永く区中の縁を謝せん／我今四十餘、此より身を終わるまで閑ならん／若し七十を以て期せば、猶ほ三十年を得ん

霊境与異跡、周覧無不殫。一遊五昼夜、欲返仍盤桓。
我本山中人、誤為時網牽。牽率使読書、推挽令效官。
既登文字科、又忝諫諍員。拙直不合時、無益同素飡。
以此自慙惕、戚戚常寡歓。無成心力尽、未老形骸残。
今来脱簪組、始覚離憂患。及為山水遊、弥得縦疏頑。
野麋断羈絆、行走無拘攣。池魚放入海、一往何時還。
身著居士衣、手把南華篇。終来此山住、永謝区中縁。
我今四十餘、従此終身閑。若以七十期、猶得三十年。

即ち、「自分は本来『山中の人』だが、諫官となり身心を消耗しつくした。下邽退居後『憂患を離』れ、山水の遊びも自由にできるようになった。最終的にはこの山に来て住み、三十年の余生を閑適に暮らすのだ」と。最後に表明された「閑適への決意」は、先に見た「適意」二首に「人心は適に過ぎず、適の外復た何をか求めん」（其の一）、「悠悠たり身と世と、此より両つながら相棄てん」（其の二）とあった決意と共通のものである。さらに、「身に居士の衣を著け」とあるが、この姿は後の「香山居士」白居易の原型だろう。

王順山の悟真寺近くに終の棲家を得たいという願望は、「藍田山に遊んで居を卜す（遊藍田山卜居）」詩にも表明されている。

腰下の組を脱ぎ置き、心中の塵を擺（はら）ひ落す／朝には玉峯の下を蹋み、暮には藍水の濱を尋ぬ／行歌して山に望んで去く、意は郷に帰る人に似たり／幽僻の地を求めて、疎慵の身を安置せんと擬す／本性　山寺を便とす、応に須く悟真に旁ふべし

脱置腰下組、擺落心中塵。行歌望山去、意似帰郷人。
朝蹋玉峯下、暮尋藍水濱。擬求幽僻地、安置疎慵身。
本性便山寺、応須旁悟真。

この詩は先の「一百三十韻」詩の縮約版である。「朝には……」「暮には……」の二句は、「一百三十韻」の「暁に尋ぬ……」「西北　日落つる時……」以下の表現と対応するだろう。詩に拠れば、居易は実際、悟真寺付近に住居のための土地を探したのである。なぜ悟真寺付近かといえば、「本性山寺を便とす」るから。即ち、自分は生来、山寺が性に合う人間だから、である。居易にとっては、「自分の本性に適う

土地」でなければ「真の故郷」とはなり得なかった。藍田山悟真寺は、正に「真の故郷」にふさわしい場所。「行歌して山に望んで去く、意は郷に帰る人に似たり」の句には、「真の故郷」と出会えた喜びが現れている。

この実感は、居易にとって本質的なものである。なぜなら、二年後の元和十一年秋に、香爐峯と遺愛寺との間に位置する「廬山草堂の土地」と出会った際の気持ちを、「元和十一年秋、太原の人白楽天、見て之（これ）（その土地）を愛すること、遠行の客の故郷を過り、恋恋として去る能はざるが若し。因って……草堂を作為す。」（「草堂記」1472）と表現している事実と、時空を越えて共通しているからである。同じ思いを、「香炉峯下　新たに草堂を置き、事に即きて懐を詠じ、石上に題す」詩（0303）では「終老の地を獲たるが如く、忽乎として還るを知らず」と表現していた。

即ち、元和九年秋における「藍田（王順）山悟真寺」との出会いは、元和十一年秋における「廬山（遺愛寺付近の）草堂の土地」との出会いの、「予行演習」になっている。逆に言えば、「廬山草堂との出会い」は、「悟真寺との出会い」の「再現」なのであった。両所の環境は、何れも「山寺を便とす」る居易の本性に適う場所であり、それゆえ「真の故郷」へ帰ったような気持ちがした。後年、長慶元年（八二一）に新居の土地を新昌里に求めた際の詩（「新昌新居、書事四十韻」1259）でも「他人の愛するを覓めず、唯だ自性を将て便とするのみ（不覓他人愛、唯将自性便）」と述べている。白居易にとって居住地を選ぶ際に重要なことは、「自己の本性に適う場所（環境）であるか否か」であった。

しかし、長安復帰を間近に控えた居易は、この時すぐに悟真寺近くに住むわけにはいかず、後ろ髪を引かれながら山を降りるほかなかった。次の「悟真寺に遊び、山下を廻り、張殷衡に別る（遊悟真寺、廻山下、別張殷衡）」は、その際の気持ちを詠じた詩である。ちなみに「張殷衡」については、「村居、張殷衡に寄す（村居、寄張殷衡）」（0785・元和九年）に「聞く君が江東へ発し去らんと欲すと、能く茅庵に到りて別を訪ふや無や（聞君欲発江東去、能到茅庵訪別無）」とある。居易は、張が長安から江東へ旅立つにあたり、下邽の拙宅へ彼を招き、共に悟真寺に遊んだのであろう。張は下山後、また長安へ戻ったようである。

世縁未だ了らざれば住し得ず／青山に孤負（そむく）する心共に知れり／愁ふらくは君が又た都門に入り去ることを／即ち是れ紅塵の眼に満つる時

世縁未了住不得、孤負青山心共知。愁君又入都門去、即是紅塵満眼時。

この詩の「青山」は、悟真寺のある王順山のこと。先に見た元和五年四月の「青龍寺早夏」詩にも「青山は寸歩の地、自ら問ふ心如何」とあった。両詩の「青山」を比較すれば、元和五年の時点では、呉丹の生き方に触発され「林丘（青

山）」ではなく、「人間（都市）」に「閑地」を求めた。一方、悟真寺と出会った元和九年八月には、「青山（山寺）閑居」への願望が、著しく高まっていたのである。

だとすれば、銭徽や崔羣が顕官復帰を画策してくれたにもかかわらず、居易がそれを謝絶した気持ちも、多面的に理解できるだろう。諫官期の「ストレス再現の回避」以外にも、下邽退居期に固めた「閑適への決意」や、悟真寺との出会いによる「真の故郷の発見」などが、顕官拒否の理由になったと見ることができる。こうした居易の希望を容れ、友人が斡旋した結果、与えられた官職が、太子左賛善大夫であった。

五　まとめに代えて――太子左賛善大夫と昭国里

元和九年の、おそらく晩秋であろうか、長安に復帰した居易は、以前住んだ華陽観の旧居に仮の宿を取った。「重ねて華陽観の旧居に到る（重到華陽観旧居）」（0839）詩にいう。

「憶ふ昔初めて年三十二、当時秋思已に堪へ難し。若為ぞ重ねて華陽院に入る、病鬢愁心四十三」と。その後、冬には昭国里に家を借り、長安での生活を再開。太子左賛善大夫に任命され、久しぶりに朝廷へ出仕した。うんざりした気持ちを、次の詩「初めて賛善大夫を授けられ、早朝李二十助教に寄す（初授賛善大夫、早朝寄李二十助教）」（0811・元和九年）でこう述べている。

病身初めて青宮（東宮）に謁せし日、衰貌新たに白髪を垂るる年／寂寞たる曹司は熱地に非ず、蕭条たる風雪は是れ寒天／遠坊早に起きて常に鼓を侵し、瘦馬行くこと遅くして苦だ鞭を費す／一種君と共に官職冷ややかなり、如かず猶ほ日高くるまで眠るを得んには

病身初謁青宮日、衰貌新垂白髪年。寂寞曹司非熱地、蕭条風雪是寒天。遠坊早起常侵鼓、瘦馬行遅苦費鞭。一種共君官職冷、不如猶得日高眠。

しかし、この詩を根拠に「白居易は賛善大夫の職に不満を抱いていた」と断定するのは早計である。この詩は「李二十助教」李紳に宛てたものだが、直前の晩秋に李紳へ酬いた詩がある。その「渭村にて李二十の寄せらるるに酬ゆ（渭村酬李二十見寄）」（0810・元和九年）にいう。

百里の韻書　何ぞ太だ遅き、暮秋把り得たり暮春の詩／……／歎く莫かれ学官の貧にして冷落せるを、猶ほ勝る村客の病んで支離するに

百里韻書何太遅、暮秋把得暮春詩…莫歎学官貧冷落、猶勝村客病支離。

これを踏まえれば、先の詩に「一種君と共に官職冷ややかなり、如かず猶ほ日高くるまで眠るを得んには」とあったのは、晩秋には「村客」より「学官」の方がましと思っていたが、今や君と同じ「官職冷ややか」の身になってみると、やはり「村客」の方がよかったよ、という自嘲、かつ李紳へ

の「共感的挨拶」と解釈するべきであろう。この詩で居易は、閑官へ転身した自己を客観視し「苦笑い」しているのである。真冬に遠距離を出仕する労苦は事実にせよ、それは居を昭国里に定めた時から「覚悟の前」であろう。この詩から「居易は賛善大夫の職に失望し、不遇をかこっていた」と、その感情を断定するのは、誤解と言わざるを得ない。平岡氏がもう一つ根拠に挙げておられる「白牡丹」（0848）の詩も同断だろう。

白花冷淡にして人の愛する無きも、亦た芳名を占めて牡丹と道ふ／応に東宮の白賛善の、人に還た朝官と喚び作さるるに似たるべし

白花冷淡無人愛、亦占芳名道牡丹。応似東宮白賛善、被人還喚作朝官。

白牡丹については、数年前に銭徽と唱和した「白牡丹の詩　銭学士に和する作（白牡丹詩　和銭学士作）」（0031・元和二～六年）において、こう詠じていた。「憐れむ此の皓然の質、人無くして自ら芳馨。衆は嫌へども我独り賞し、移し植ゑて中庭に在り（憐此皓然質、無人自芳馨。衆嫌我独賞、移植在中庭）」。白牡丹は、居易が特に愛した花であった。

ちょうどこの頃、八月に悟真寺へ同行した張殷衡が、長安を離れ嵩陽（洛陽東北の県）へ帰ることになった。「張山人の嵩陽に帰るを送る（送張山人帰嵩陽）」（0583・元和九年）詩にいう。

黄昏惨惨として天微かに雪ふり、修行坊西　鼓声絶ゆ／張生馬は瘦せ衣は且つ単なり、夜柴門を扣きて我と別る／……／酒は酣にして火は煖かく君に言ふ、君は何ぞ関に入りて又関を出づると／答へて云ふ　前年偶々山を下り、四十余月長安に客たり／長安は古来名利の地にして、空手にして金無ければ行路は難し／……／春明門、門前は便ち是れ嵩山の路／幸ひに雲泉の此の身を容るる有り、明旦君を辞して且に帰り去らんとすと

黄昏惨惨天微雪、修行坊西鼓声絶。張生馬瘦衣且単、夜扣柴門与我別…酒酣火煖与君言、君何入関又出関。答云前年偶下山、四十余月客長安。長安古来名利地、空手無金行路難…春明門、門前便是嵩山路。幸有雲泉容此身、明旦辞君且帰去。

通説では「張山人」は未詳とされているが、張殷衡であることに疑いはない。山を愛する「山人」であればこそ、居易は彼を藍田山や悟真寺へ誘ったのであった。

賛善大夫として昭国里で暮らし始めた居易は、元和十年の初夏であろうか、その暮らしぶりを「朝より帰り事を書して元八に寄す（朝帰事書寄元八）」（0266）詩で、こう詠じている。「元八」は元宗簡である。

進んで閤前に入りて拝し、退きて廊下に就きて飡す／帰りて来る昭国里、人臥して馬鞍を歇む／却って睡りて日午に至り、起坐して心恬然たり／況んや好時節に当た

り、雨後清和の天／柳樹緑陰合し、王家庭院寛し／瓶中には鄂県の酒、牆上には終南山／独り酌みて仍ほ独り望み、襟を開いて風前に当たる／禅僧と詩客と、次第に来たりて相看る／語らんと要せば夜を連ねて語り、眠るを須むれば終日眠る／朝謁に奉ずるを除非して、此の外拘牽無し／年長じて身且つ健なり、官貧にして心甚だ安し／幸ひに急病の痛み無く、飢寒に苦しむに至らず／此を以て聊か自適し、外縁干す能はず／唯だ静者の信に応じ、動者の為に言ひ難し／台中（御史台）の元侍御、早晩郎官と作らん／未だ郎官と作らざる際は、人の相伴って閑なること無し

進入閤前拝、退就廊下飡。帰来昭国里、人臥馬歇鞍。
却睡至日午、起坐心恬然。況当好時節、雨後清和天。
柳樹緑陰合、王家庭院寛。瓶中鄂県酒、牆上終南山。
独酌仍独望、開襟当風前。禅僧与詩客、次第来相看。
要語連夜語、須眠終日眠。除非奉朝謁、此外無拘牽。
年長身且健、官貧心甚安。幸無急病痛、不至苦飢寒。
以此聊自適、外縁不能干。唯応静者信、難為動者言。
台中元侍御、早晩作郎官。未作郎官際、無人相伴閑。

この詩では、昭国里の暮らしへの満足が様々に語られ、最後に「動者」の一員として多忙を極める御史台の元宗簡に対して、自由時間の多い「郎官（尚書省の官）」への転職を勧めている。「瓶中には鄂県の酒、牆上には終南山」。酒と山は、居易としては欠かせない住環境の条件である。憧れた呉丹の住まいでも「南山舎下に入り、酒甕床頭に在り」とあった。「朝謁に奉ずるを除非して」の一句は、遠距離出仕の難儀以外の点においては、居易が、昭国里での暮らしに満足していたことを示している。

さらに「昭国里閑居」（0268・元和十年）の詩にいう。

貧閑にして日高くして起き、門巷　昼寂寂たり／時は暑にして朝参を放され、天は陰りて人客少なり／槐花田地に満ち、僅ど人行の跡を絶つ／独り一床に在りて眠る、清涼たる風雨の夕べ／嫌う勿かれ坊曲の遠きを、近ければ即ち牽役多し／嫌う勿かれ禄俸の薄きを、厚ければ即ち憂責多し／平生恬曠を尚ぶ、老大宜しく安適すべし／何を以て吾が真を養ふ、官閑にして居所僻なり

貧閑日高起、門巷昼寂寂。時暑放朝参、天陰少人客。
槐花満田地、僅絶人行跡。独在一床眠、清涼風雨夕。
勿嫌坊曲遠、近即多牽役。勿嫌禄俸薄、厚即多憂責。
平生尚恬曠、老大宜安適。何以養吾真、官閑居所僻。

最後の二句は、長安復帰後「太子左賛善大夫へ就任し、昭国里に住む」という暮らしが、居易自身の主体的な選択であったことを明示している。居易は「吾が真」即ち自身の「恬曠（心静かでのんびり）」「安適」を保守するため、「官閑」「居所僻」という環境を、自ら選び取ったのである。それは憧れた呉丹の暮らしに近づくことでもあった。

その呉丹から、夏に手紙が届く。「呉七の寄せらるるに酬ゆ（酬呉七見寄）」（0267・元和十年）にいう。

曲江に病客有り、尋常　多く関を掩ふ／又馬の死してより来（このかた）、出でずして身更に閑なり／書を送る者有りと聞き、自ら起ちて門を出でて看る／……／首章に時節を歎じ、末句に笑言を思ふ／嬾慢して相訪はず、街を隔つること山を隔つるが如し／嘗て聞く陶潜の語、心遠ければ地自ら偏なりと／君は安邑里に住し、左右車徒喧し／竹薬深院を閉ぢ、琴罇小軒を開く／誰か知らん市南の地、転た壺中の天を作すを／君は本　上清の人、名は石室の間に在り／知らず何の過ち有りてか、謫せられて人間の仙と作る／常に恐る歳月満ち、飄然として紫煙に帰るを／忘るる莫かれ蜉蝣の内、進士同年有るを

曲江有病客、尋常多掩関。又従馬死来、不出身更閑。
聞有送書者、自起出門看…首章歎時節、末句思笑言。
嬾慢不相訪、隔街如隔山。嘗聞陶潜語、心遠地自偏。
君住安邑里、左右車徒喧。竹薬閉深院、琴罇開小軒。
誰知市南地、転作壺中天。君本上清人、名在石室間。
不知有何過、謫作人間仙。常恐歳月満、飄然帰紫煙。
莫忘蜉蝣内、進士有同年。

呉丹の住居は東市の南、喧噪の地「安邑里」に位置したが、その住まいは「壺中天」のような別世界であった。同年の進士である居易は、五年前の「呉丹に贈る（贈呉丹）」（元和五年）詩で、憧憬を「人間に閑地有り、何ぞ必ずしも林丘に隠れん。……終に当に閑官を乞ひ、退いて夫子（呉丹）と遊ぶべし」と述べていた。今や太子左賛善大夫の「閑官」に就き、昭国里の「閑地」に住まうことになった白居易は、かつて憧れた「太子通事舎人呉丹のような暮らし」を自らも実現し得た状況にあったのである。六月三日の武元衡暗殺事件は、正にそのような時に起こった。だとすれば、居易のいち早い上書の理由を、「太子左賛善大夫という閑職への不満」に求める通説は、成立し難いであろう。上書の理由は他に求めなければならない。その点については、稿を改めて論じたいと思う。

注

（1）第一稿は、「『山の詩人』白居易〔一〕――生誕から三十四歳まで――」「愛媛大学法文学部論集　人文学編」第五十号、二〇二一年。第二稿は、「『山の詩人』白居易〔二〕――仙遊寺・「長恨歌」・山水画家――」「愛媛大学法文学部論集　人文学編」第五十二号、二〇二二年。

（2）同氏著『中国詩文選17　白居易』（一九七七年・筑摩書房「宰相武元衡暗殺事件」）。

（3）川合康三氏も以下のようにいう。「喪が明けて朝廷に戻った白楽天に与えられた官は、太子左賛善大夫という閑職であった。皇太子の顧問、つまりはお守り役で、政治の中心からは遠い。将来の高官を約束されたキャリアを走っていた白楽天が満足できるはずはない。鬱々と過ごしていたであろうその時、耳目を驚かす事件が起こった。」同氏著『白楽天―官と隠のはざまで―』（岩波新書・二〇一〇年）

（4）本文は岡村繁『白氏文集　一～十二下』（新釈漢文大系・第97～119巻、明治書院）に拠ったが、漢字は新字体に改めた。作品には花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、一九六〇年）による作品番号を付した。

（5）制作年順に「奏状」の作品番号を示しておく。（　）内の作品は、恩賜への謝状。〔　〕内は端境期の作品。

元和二年：（1973）（11月）・（1974）（12月）
元和二年～三年：〔1949左拾遺就任前？〕
元和三年：1947・1948・1950・1958・1970
元和四年：1951・1954・1956・1957・1959・1960・1962・1963・1964・（1979）
元和五年：1965・1966・1967・〔1969左拾遺就任後？〕・1971（陳情）・1972（謝官）
元和六年：1968
元和二年～六年：（1977）
元和三年～六年：（1975）・（1978）・（1981）・（1982）・（1983）
元和三年～五年：（1976）・（1980）・（1984）

（6）白居易と銭徽との交友については、丸山茂著『唐代の文化と詩人の心――白楽天を中心に――』（二〇一〇年・汲古書院）に詳しい。「銭起の子銭徽は出仕前、長安南郊の藍田山のふもとに住んでいた。そこはかつて銭起と王維が詩を交わし、脱俗の境地を逍遙した『別乾坤』である」と。

（7）拙稿「閑適への決意―下邽における心理的基盤の形成―」『白居易研究年報』第十四号（二〇一三年・勉誠出版）

（8）和田浩平「白居易の母について」「学習院女子大学紀要」二十三号（二〇二一年）参照。

（原稿受付　二〇二二年九月二八日　　掲載決定　二〇二二年一〇月二一日）